

「続、転向論」3

(「『転向論』の反省」から統一戦線へ)

2018/2/10

郵政ユニオン長崎、中島義雄

一、はじめに

今回の、「続、転向論」はNO3である。

その経過であるが、2017年10月に郵政シルバー・ユニオン（退職者組合）が「10周年記念誌」を刊行した。そのおり、私の「転向論」（2015年でNO2）と「郵政全労協の歴史本=外史」を同時に全国へ配布していただいた。関係者に深謝したい。

この2015年の「転向論」は、1991年の「転向批判」（NO1）を「反省する」小文（「地域と労働運動」に掲載）であった。これに対して、周囲から「郵政ユニオンの中島がなぜ『自己批判』をするのか」と異論が出た。「連合の正当化」への疑念でもある。

私たち郵政ユニオンの立場は反連合・非全労連の全労協であり、これは基本である。その上で1991年の労働界再編時に郵政全労協結成を行い、次に2012年の全労連の郵産労との組織統一を行った。この二つはいずれも正しかったし、この立場は不変である。しかし、時代は待ってくれない。社会の危機はだれの目にもはっきりしているが、労組の現状では勝てない。私たちはいまなにをなすべきか。その認識から、私たち少数左派の組織統合を含めた共同闘争と統一戦線の形成をなし、新たなたたかいが急務であると考え。そのために私はこれまでの対立と分岐を解消し、宥和と正常化をめざすために、そのトゲとなっている「転向批判」を取り消したい。

さらにもう一つ。先の「転向論」をいま読むと、少し意が尽くされていない。そこで「外史」と「転向論」を補いながら、二つをまとめたい。これが本稿の目的である。

二、転向論を再度

人は時代の転換点にどう生きるのか。これは永遠のテーマだ。人の生き方を変える＝転向とは、宗教的には絶対正義の神を捨てることで、政治的には主義・主張を変えることをいい、普通に言ってこれは許されない。そこでは自らの信仰心や主義・主張を守り、神や組織と運命を共にすることを殉教や殉職と呼ぶ。

まさに思想と生き方が厳しく問われる瞬間である。

戦後の日本ではレッドパージを伴う三度の労働界再編があったが、いずれも左派が破れている。今回、転向の是非を問うたのは 1989 年の労働界再編時の組織選択である。この年、総評が解体され、連合ができた。階級闘争と社会主義を語ってきたものが、自由主義を掲げ、左派を排除する連合へ加盟する。その是非であり、転向か否かである。

この再編のとき国労は連合を拒否し、全労協に加盟した。国労は国鉄の分割・民営化に反対してたたかい、結果的に 10 万人が職場を去り、1047 名の労働者が解雇されたが、この人たちは組織に殉じたのだ。私たち郵政ユニオンも国労と共に歩み、全通を離れ、全労協の独立労組を作った。郵政の場合は、民営化時に解雇はなかったが、運動と組織路線は厳しく問われた。

そして、いまである。自・公、希望、維新やリベラルも取り込んだ安倍政治は新たな戦争へと攻撃を強めている。一方、左派は諸党派に分解し、対立と論争が続く。個々は懸命にたたかい、正直に生きていると思うが、左派は情勢に遅れ、国民の期待に応えきれていないとも感じる。

この時代に社会主義と階級闘争を語ってきた者はどうあるべきか。労組の基本は、1989 年の労働界再編の 3 鼎立状況を変え、反安倍の共同闘争と統一戦線の流れをつくることだと思う。

三、長崎=地域での変化と思い

長崎の話から始めたい。2017 年 12 月の年の瀬に、長崎では公共交通の二つのストライキがたたかわれた。一つは五島の島々や離島便を独占運行する九州商船 KK の労使が、会社の社員採用と組織問題で対立したのだ。年末ぎりぎりのクリスマス・ストに、正月の里帰りを楽しみにしていた離島の住民の方は困惑し、労使双方へ苦情を寄せた。とりあえず、九州商船のストは一日で妥結した。この会社に労組は複数あり、ストは海員組合（旧同盟で現連合）であるが、会社の別の労組 = 九州商船陸員組合は地区労加盟でもあり、複雑の諸事情はありながら、地区労もこのストを支援した。（「労働情報」の 2 月号に、この記事が掲載されたのでお読みいただきたい）。

もう一つは、長崎県内の南半分を運行する長崎バス KK の争議である。2015 年 12 月、長崎バスの多数派労組で連合の私交通（800 人ほど）から脱退して、バスユニオンを 68 名で立ち上げ、地区労へ加盟する。長崎における労働界の、組織的な大きな変化であった。

きっかけは 2015 年夏に、始業時の運転前の飲酒検知機で酒気帯びの表示が出

た3人の運転手が懲戒解雇された事件で、私交通が闘わなかったことなどから、職場の不満が高まり、新労組結成となる。旧私鉄総連系中心の新労組のバスユニオンはいま120名を超えて、すでに二度もストをたたかっている。しかし会社は不当にも新労組を認めず、さまざまな組合差別や懲戒処分、不当な配転、運転手へのバスの配車差別、残業命令差別など、組合つぶしに奔走している。バスユニオンは労働委員会や裁判、あるいはストなどでこれらとたたかっている。この間の経過は、裁判を担当されている中川拓弁護士が書かれた、「労働情報」(2017/11月号)や、「月刊労働問題」(2017/11月号)と、当該のバスユニオンの嵩(だけ)委員長が書かれた闘争の報告「日本の針路」(2017/11月号)にあるので参照されたい。

もともと長崎バスは同盟系の長崎バス労組と私鉄系の労組があったが、2004年に統合し私交通となり、それぞれの上部団体を離脱し、企業内労組として連合へ加盟していた。その中からの分裂独立であるが、地区労サイドからは勇気ある行動に拍手が起きた。その後、組織が二倍に増え、終日のストを二度(2015年10月と12月)も打つ行動力に、地元では支援共闘会議もできて、たたかいが続いている。バスユニオンは長崎でも連合の多数派労組から脱退しても生きていけることを立派に証明している。これをきっかけに長崎の空気が少し変わってもらえればと思っている。

郵政ユニオンも飲酒検知機解雇撤回裁判への支援や、2017年10月のスト支援集会に駆けつけ、連帯のあいさつを行うなど、ともにたたかっている。郵政ユニオンもバスユニオンも、ともに連合労組からの脱退独立という意味では同じ行動であり、私たちも「これもありだ」という点で、少し道が開けたと思っている。かつて、私の「連合批判」や「転向論」で、周囲からは「郵政ユニオンは絶対に許さない」とされ、地区労加盟を10数年間も拒否された経過から見れば、地区労も地域の環境も幾分か変わったのだと実感する。

結論をいえば、解雇をたたかわない私交通(連合)は、会社との協調を基本としており、今回のこの解雇ですら、そもそも解雇される人の自己責任だという労組だ。こんな労組に組合費を払い続けることは保険にもならないし、逆に自分の首を絞める行為なのだ。だからバスユニオンの脱退は正しく、ストも正しい。これを差別し、つぶそうとする会社と連合労組は間違っている。スト支援集会で私はこのような連帯の言葉を挨拶で述べた。バスユニオンは長崎の新しい風だ。西の風が東へ吹けば、日本の労働組合も少しは変わるだろう。

四、伊達工(広島中郵)さんへの謝罪

、長野県、昼神温泉の出会いと謝罪

郵政に話をもどそう転向論・NO2にも書いたが、おもえば私にとって2015年4月14～15日の郵政シルバー・ユニオンの結成10周年を記念しての、長野の昼神温泉の第1回全国交流会は、郵政におけるこの転向批判の反省。謝罪と宥和の起点となる出会いであった。

私は、激動の労働界再編の荒波をくぐりぬけてきた郵政ユニオンの仲間は、党派や過去のキャリアを超えて、とりわけ強い絆でつながっていると思う。ただ現在、郵政ユニオンは郵産労との組織統一という大きな転換点を回り、旧郵政ユニオン結成の原点（反連合・非全労連）とは少し別の立ち位置にあることは紛れもない事実であり、それだけにこの出会いは、その組織統合という再編の総括もふくめて、新たな路線への大切な話し合いの場でもあった。しかし、現実には郵産労との組織統合はいまもなおシルバーでは議論は深まっていなく、幾分距離感がある人も多い。

私にとって、昼神温泉の交流会は、退職後10年余、旧友たちとの久しぶりの出会いであった。その目的は、1991年に私が書いた「転向論」（転向批判）への反省と謝罪だった。そして私はこの場に2015年2月、「地域と労働運動」に書いた「転向批判の反省文」NO2を持参した。なかでも直接は、当時、独立労組結成の時期をめぐり、郵政全協内部で対立した旧全逓広支那中央の支部長だった広島伊達工さんへの謝罪を、改めてきちんと行うことであった。（彼は後に広中労組をつくり、郵政ユニオンの仲間となられたが）

私は伊達さんへ、お詫びの気持ちを込めて短歌を作り、自筆の書を額に飾り寄贈した。無論、書も歌も素人であるが、私にはこの感謝の折句の贈呈は、長年の宿題をやり遂げる思いがあった。

折り込み短歌

伊達工（だてたくみ）さんのお名前を頭に折り込んだ歌である。

断機の戒（だんきのかい）

手本学びし（てほんまなびし）

工尊（たくみそん）

株の気概（くいぜのきがい）

未来永劫（みらいえいごう）

という短歌で、「私はこれまで伊達工さんをお手本に生きてきたし、今後これも変わらない」という感謝の意味だ。

、長崎、金剛園での出会いから。

この項は、郵政全労協の歴史「外史」の前史ともなる。長崎の焼き肉店（金

剛園)での出会いからだ。当時、全通は原爆被爆者の協議会を作っていた。毎年、原水禁運動と同時に、広島と長崎で交互に集会が開かれてきた。この出会いが幾度か重なり、個人的にも長崎は広島と親交ができる。これが伊達さんと私の親しい出会いのきっかけである。

1978年に始まる郵政全協の結成の前史だが、まだ長崎や広島もお互い全通であった。いつも伊達さんがいわれる、長崎中郵の近くの焼き肉店(金剛園)で、九州の焼酎(六調子)を酌み交わしながらの交流会が、最初の出会いであるそうだ。しかし私自身が全国との関与を否定していたからか、あるいは私が支部の幹部でもなかったからか、この出会いや話の中身の記憶は正直、あいまいだ。

このころの私は「民同派」で、当然のちにできる郵政全協(全通内反対派で社共を乗り越える政治路線を掲げた)とはかなり距離を置いていた。だからのちにできる郵政全協の前身=全通活動家連絡会や雑誌「伝送便」の創刊の会議などには全く出ていない。

その私の立場と意識を変化させたのが、この広島の伊達さんとの幾度かの出会いであり、彼の言葉に従来の左派とは異なる人としての温かみを感じ、私はこの道を少しずつ歩み始める。そのきっかけが「金剛園での出会い」であり、それから伊達さんは、私の師となる。

それ以降、伊達さんとは郵政全協で運動を共にして、さらに志を同じくする仲間となっていく。しかし、1991年の郵政全協の結成の前後では、独立労組の立ち上げの時期で、相互に時間的なずれがあり、「共に全協へ」という結果を共有できなかったことで、対立がおき、両者に距離ができる。議論の過程で、激しい論争や別れの言葉を発したこともあった。

これは必ずしも伊達さんを特定していうことではないが、この時期に「全通派」と呼ばれる人々との意見の対立と不協和音についての整理は、私のその後の生涯の課題となる。その対立の発端が1991年に私が「伝送便」に書いた「転向批判」にあることも事実である。以来、私の心の奥底に、この転向批判は「わだかまり」としてずっと残る。これが私をして「外史」を書かせた一つの動機であり、「転向論」NO2で転向批判を取り消した。これが思いの原点であった。

五、四人の全通中央支部の支部長

「外史」の流れであるが、1970年代の歴史である。かつての郵政には各都道府県に中央郵便局があり、全通はその中郵を中心に中央支部という組織があった。全通の中央支部といえ、各県では中心的な存在であり、その支部長といえ、地区の核であった。組織内でもまた地域共闘でも、黙って本部派につけ

ば、それなりに厚遇を受ける役職だ。一度その職につけば、多くが反対派の旗を降ろす。支部内の現場の組合員の期待には反するが、協調派として働き、郵政の第 2 の労対部的に動くことを求められる。多くの活動家は若き頃の志を捨てることで支部長になるが、なったあとでいわば変身する人も多い。非転向・階級路線では生きていけないからだ。

そのなかで、全逓を離脱し独立労組を作った人は私の知り限り 4 人いる。順に言えば、**が**、福岡中郵の今永公男さんで、全福岡中郵労働組合を作った。

が、東京中郵で独立労組をつくり、のちに郵産労へと移った廣岡元穂さんである。**が**、広島中郵で 1991 年ころは全逓に所属し郵政全協派であった伊達工さんである。彼はのちの 1993 年には広島中郵労組を作る。**が**、長崎中郵で、郵政長崎労組をつくった私である。

いずれも反全逓ではあるが、みんな別々の組織であった。大きなたたかいを考えるものが、バラバラでいいはずがない。統一と共同闘争はこの四組織にこそ必要であったが、統合は一夕には難しい。しかし、全福郵労以外はなんとか郵政ユニオンでまとまることができた。しかし、現在も連合として旧全逓（現、JP 労組）にいる仲間とは、一度切れた糸はなかなかつながらない。対立はなかなか溶けず、郵政ユニオンとは距離ができたままだ。

六、過去の転向期

転向論へ戻る。過去、日本の近代史では、幾度か転向の是非を問う時期があった。歴史をふりかえる。

、キリシタン弾圧、踏み絵と改宗

日本における近世の始まりの 1550 年のキリスト教伝来から、1589 年の秀吉の禁教令と、徳川家光の時代の 1636 年の島原の乱までの 80 年間は、キリシタンには転向か死かの厳しいときであった。キリスト教の信仰と棄教である。これは遠藤周作の「沈黙」に詳しい。2017 年にまたアメリカ映画の「サイレンス」も上映された。遠藤は作中で、たとえ司祭であっても、神は踏み絵を許されるとして、人間は生きることを最優先とした。しかし、京都大学の教官として大学闘争を体験し、自らの思想性を問うて「わが解体」を書いた作家の高橋和己は、『沈黙・評論集』のなかで、「司祭の転向と一信者のキチジローの転向は違う」とも書き、司祭の転向を否定する論もある。1970 年代の自らの思想に正直な人ならではの思いであろうか。

、徳川時代の幕末、佐幕派から尊王派へ

徳川時代の幕末の始まりとされる 1853 年のペリー来航から、1868 年の

明治維新への流れと、その間の徳川家康を神とする佐幕派から尊王派（天皇親政）への転向である。明治維新は尊王派から見ると徳川幕藩体制の打倒であるから革命だが、佐幕派で徳川に殉じた人から見ると、尊王派は転向となる。

一例だ。幕末、幕府側の最高の政治家は1853年にペルー来航＝開国要求事件で、200年間の鎖国を解いた老中筆頭・阿部正弘である。（将軍はこの騒動の渦中に病死している）。彼もその3年後に若くして病死するが、その懐刀とされた勘定奉行の川路聖謨は、1854年にロシアとの外交交渉（領土問題では日本史で初の交渉）を幕府代表として任され、長崎での一月間の交渉でこれをまとめ、ロシアとの武力衝突を回避した政治家である。開国の時代の要の人で、その足跡は「長崎日記」や「下田日記」に詳しい。その彼は幕末・維新の江戸城の無血開城のときに、幕府敗北の責任を取って切腹して果てる。自決は評価しないが、こぞって佐幕派から尊皇派へ転じる時代に、転向拒否としては特筆すべき人だ。

閑話休題的に付言するならば、川路はこの長崎の交渉を終えた1854年1月、長崎警備の佐賀藩が長崎港外で行った大砲の実射実験に立ち会い、製鉄製（非青銅製）の大砲の破壊力におどろき、これは老中の阿部正弘に報告される。そして幕府は一年後のペルー再来航に備え、江戸警備のために品川の台場に大砲50門の建設を佐賀藩に依頼し、江戸を守ったとされる。幕府も薩摩も長州も製鉄の技術＝反射炉を完成させていないときの話である。いいかえれば、幕末期に日本が外国との全面戦争にならなかったのは、佐賀藩の新技术の高さと、この川路聖謨の力によることが大きいという。（「幕末期の佐賀藩」から）

、大正、昭和のデモクラシー派から国家主義へ

日本における政治的な思想転向での最大は、やはり戦前の治安維持法と社会主義者と知識人弾圧が最大だ。

明治と大正、昭和初期の転向論では、護憲、民主化闘争とされる大正デモクラシーと治安維持法による大弾圧の選択である。1920年代の戦争の時代から1945年の敗戦までの、戦前の厳しい時代の非戦・左派から戦争・国家主義への転向である。先駆者では共産党や社会党を作った片山潜や堺利彦と、大逆事件などで処刑された幸徳秋水たちだ。社会主義が許されない冬の時代を、社会主義を信じて筋を譲らず生きた人たち。この先達の背筋がピンとした生き方は、今日でもまばゆいばかりである。また戦時中に治安維持法で獄に長く囚われた人々。検挙された7万を超える人の抵抗心は、現代では真似ができない厳しさである。幾度でも彼らの原点と足跡を学びたいと思う。

「戦争と知識人」や「知識人言論弾圧の記録」などによれば、1937（昭和12）年の盧溝橋事件が対中戦争の開始として、日本の転換期とする。そのはしりが「世界文化弾圧事件」や「第一次人民戦線事件」での、無産党の国会議員や労農派の教授グループが全国で486人も検挙され、無産政党や全評などの多くが結社禁止となり、ここに合法組織は壊滅し、労農・無産団体の組織的転向が生じた」と書いている。歴史によれば、残されていた合法労組は戦争協力とスト絶滅宣言を出し、翌年に、国家総動員体制がでて戦時体制が完成する。

このときの転向には治安維持法で検挙されると、5段階のレベルでの転向を迫られた。第一段階が「マルクス主義を主張するもの」（革命派）の放棄から、順に段階があり、第5段階で「日本精神を実践するもの」（戦争推進派）で、具体的な戦争推進参加までに分けられ、鋭い攻撃がかかったとされる。そしてさらに大事なことは、こうしたことが一般社会の行動を行うすべての人々に適用された、と書いている。（「戦争と知識人」から）文字通り総動員で、すべての人に思想の転向は迫られたのだ。

戦前の転向論で「戦後の革新思想」の中で丸山真男は、この『存在は意識を規定する』から『民族が意識を規定する』と言いかえて転向した」と書いている。しかし個人が国と権力に抗し、非転向を貫くことは難しかったと思う。現代とは比較にならないほど、戦前の社会主義者への弾圧過程では、非転向は長期投獄と死をも意味したわけで、現代の私の想像をはるかに超える。

1987年の国鉄分割・民営化、国労解体の攻撃のとき、民営化反対から賛成派への転換だけでなく、その民営化や国労解体のための具体的な行動を、その証明として求められたことは有名であり、争議なしの労使宣言はもちろん、現場では反対派の人を切り崩す働きも求められた。戦前の転向宣言でも、マルクス主義の放棄だけでなく、戦争を率先して推薦する役目までを要求された。転向とは踏み絵を伴い、踏み絵は日々実践を強制されることで、非常に鋭い攻撃の出来事なのだ。

、敗戦で、国家主義から自由主義へ

1945年の日中戦争と太平洋戦争敗北で、日本はそれまでの天皇を神とする国家主義、全体主義思想から、欧米流の自由主義思想の国家へと時代が変わる。改革・開放の時代だ。国民には天と地が逆転したはずだ。そうして出てくるのが、敗戦直後のいわゆる一億総転向論である。阪口安吾の「墮落論」などもこれに含むが、私たちの親や祖父母の時代だ。これを転向と呼ぶかどうかだが、戦争の時代から自由への解放のとき、この変化は当然にも許されるとも思う。

、1950年の産別会議から総評へ

戦後、占領軍のGHQの自由化政策が進む。労組も合法となりナショナルセンターの産別会議ができる。しかしそれからわずか5年後、東西冷戦の始まりとともに、産別会議は、一度目のレッドパージと並行したGHQと国による解散命令がでる。思想信条の自由保障と労組合法の時代からの突然の反動であり、戦後革命期の終わりでもあった。

産別派はパージされ少数派に転落する。労組内部からは産別の共産党主導に異を唱え、社会民主主義路線での総評結成が並行した。この中心は「民主化同盟」(民同)であった。このとき、共産党と産別とともに闘った人々は多くがレッドパージにあい、解雇される。まさに殉職である。このときの民同派は転向ではなかったのか。国や企業とともに左派活動家をパージする民同は多数派となり、産別も解体する。しかしいわゆる第2組合的な存在の社会党・総評運動であったが、おりからの政治のなかに、反戦・反合理化の路線を確立する。私たちがのちに所属し、正義とした全通もこれであるが、転向などなかったような「権利の全通」と称する「左派」であった。これまでが転向論の前史である。

、1989年、総評から連合へ

その総評結成から40年後の1989年秋に日本労働界の再編が起きる。総評が解散し連合が発足する。これは国労10万人のパージを伴い強行された。そのとき左派の多くはそれまでの階級的な路線から、協調路線の連合へと舵を切った。まさに正義と信じる路線からの転換である。直接的に私たちの転向が問われた30年前の路線選択である。

共産主義か社会民主主義か、否か。マルクス・レーニン主義か否か、反スターリン主義か否かはともかく、労組的には旧同盟と総評内の右派が溶けあうように融和し、自由主義の労働運動として、720万人の多数派のナショナルセンターの連合ができあがる。労働者は団結が一番とするなら、私たちのいう「反連合は誤り」であり、この再編統一には転向論などあり得ない「善」である。左派とてこの枠外には存在しえない。1989年のこのときの連合化は転向であるか否か。総評解散の最終局面ではこの議論はほとんどなく、再編は静かに終わる。

、1990年、全通から郵政全労協へ

ともあれ、1990年に私たちは連合・全通を卒業し、全労協に参加し、連合としての団結に背中を向けて、左派の結集を呼びかけた。その中で郵政全労協(ユニオン)は「裏切り者」「組織破壊分子」と批判され、全通からも除名されたことから、私も「連合参加は転向だ」と反論した。

以上が転向期の歴史経過である。

七、自由主義と社会主義

、世界の歴史

現在の日本は自由主義社会である。いま社会主義の党派へ加入したとしても、すぐ治安維持法で獄中へとはならない。日本ではこの思想信条と結社の自由は、ほんの 72 年前からであり、歴史は古くない。

そこで、少し世界を振り返る。

1848 年は世界を変えた歴史的な年である。中央公論社の「世界の歴史」によれば、1848～1849 年に、ヨーロッパで革命が起きた国や都市は 40 を超える。その波は全欧州に及ぶが、その暴動の中身は農民暴動、民族解放闘争、チャーチスト運動など多岐にわたった。

このパリの 2 月革命とドイツの決起に始まる 1848 年革命についてエンゲルスは「ドイツの農民戦争」で、マルチンルターの宗教革命と連動する 1525 年農民戦争と、この 1848 年の革命を「二つの革命」と呼ぶ。そして「これはドイツの一地方の出来事ではなく、大きなヨーロッパ的事件の一断片であった」として、全欧州へのたたかひの波及を評価し、「1525 年の革命のようには終わらないだろう」と書く。むろん、この 1848 年革命で最も大事なことは、この年にマルクスが「共産党宣言」を書き、世界に共産主義が公然と出現したことだった。しかし歴史的には労働者・農民がともにたたかった革命ではあるが、勝者はブルジョワジーと自由主義国家であり、敗者は中世の封建社会と封建諸侯、さらには社会主義と労働者・農民であり、これを機に時代は近代へと入る。

ともあれ、18 世紀の産業革命で資本家と労働者が生まれ、労働運動や社会主義運動が始まるが、最初はどこの国でも労組や社会主義は違法とされ、厳しい弾圧が行われた。マルクス自身も三度も国外追放をされ、無国籍となり最後はイギリスで没している。だが、マルクスの言葉どおりに、労働運動や社会主義は各国の労働者のたたかひによって発展し、国際的なつながりが生まれ、1864 年、世界初の社会主義者が参加する第一インターナショナルが作られる。階級闘争論での労働者保護、労働者の政治参加を目標としたが、12 年後の 1876 年、これは普仏戦争などにより足並みがそろわず解散する。

続いて、1889 年に第 2 インターナショナルができる。8 時間労働制と普通選挙法の要求などが主であった。そして世界的にメーデーが始まるが、1914 年の第一次世界大戦で、労働者の世界的団結よりも、自国防衛が優先し、これも自壊する。

そしてこの世界大戦のなかで、1917 年にロシア革命が起き、1919 年にロシ

ア共産党の呼びかけで、第 3 インターナショナルが結成される。いわゆるコミンフォルムである。日本共産党は 1922 年にこのコミンフォルムの日本支部となるが、二度の弾圧で国内組織が壊滅する。そしてイギリスやフランスの社会民主主義政党は、第 3 インターには参加せず、1924 年、労働社会主義インターを作る。これが世界の社会主義の分岐の始まりである。しかしこれも第二次世界大戦の始まりで、路線対立とともに 1940 年に崩壊する。第 3 インターナショナルも 1943 年に戦争の始まりとともに、組織は終わる。

そして、戦後となり、1951 年に社会主義インターナショナルが生まれ、社会主義政党としての国際組織として現在に至る。世界の 150 の組織が参加し、日本ではいま社民党が参加している。共産党の系のインターナショナルは、ソビエト崩壊後、ゆるやかな組織はあるが、昔のように十分に機能していないとされる。

、日本の歴史

日本で最初の労働組合は、1897（明治 30）年の労働組合期成会である。高野房太郎や片山潜らが作った。みんなアメリカで学んだ人である。しかし、これはすぐ、労働組合主義をとる高野と社会主義を求める片山で路線をめぐり分裂し、高野は海外（上海）へと去り、客死する。これが日本の労働組合の長い分岐の始まりであり、いまもなおこれは続いている。

社会主義政党でいうと、1906（明治 39）年に日本社会党が作られる。これが最初である。堺利彦らが参加した。しかし翌年これは結社禁止となり、解体する。その後、片山らが社会主義政党を作るがこれも即日結社禁止とされる。1923（大正 11）年に非合法組織として日本共産党が作られるが、第一次共産党事件で書記長の堺らが逮捕されて、1924 年に解党する。そして 1926（昭和 1）年に社会民主党や日本労農党が結成されるが、治安維持法と戦争のために、社会主義政党はすべてつぶされていく。これが戦前の歴史だ。

戦後だ。

1945（昭和 20）年 11 月 2 日に日本社会党が結成されて（片山哲と西尾末広らが指導者）、日本で一つの社会主義政党を目指した。また共産党は 11 月に全国協議会を開き、12 月に第 4 回の党の再建大会を開く。労働組合も 1946（昭和 21）年 8 月 1 日に総同盟ができ、同じく 8 月 19 日に産別会議ができ、総同盟も参加する。このように、戦前から対立した社会主義政党や労働組合は、戦後の初期をのぞき分裂が続く。

八、番外編、吉野源三郎とトルストイ

昨年は80年以上も前に吉野源三郎が書いた『君たちはどう生きるのか』が話題となった。当時と時代背景が同じだからか、リバイバルしたらしい。私ごっだが、実は去年の1月に成人した孫娘に、私は成人祝いとして、この「君たちは・・・」の本を贈り、「しっかり生きてほしい」との思いを伝えた。そのときそばにいた母親（私の娘）が突然、「私も高校を出たときに、この本を（私から）もらったよ」といったのだ。もう30年近くも前のことで、正直、私はそのことを忘れていたが、内心、人は同じときに同じ行動をとるものだと言った。ともあれ私にも若いころの愛読書だったので、ここで番外編的に紹介したい。

「君たちは・・・」は1937年（昭和12）に書かれた吉野源三郎の本だが、前述したとおり、対中国戦争の始まりと、厳しい弾圧で合法左翼が壊滅的になった年であることが特に重要である。作中の叔父さん（若い法学士）が中学生のコペル君に正しい生き方を指し示すものだ。

ところで、これはそれで非常に大事だが、コペル君という名前にその大切な意図があろう。1543年、ローマ教会と聖書（神の名）による天動説を覆し、当時では死刑すらありうる地動説を唱え、文字通り神の時代の中世から、人間の時代（近世）への転換をなした天文学者・コペルニクスに由来するコペル君。この作品で吉野は、天動説という自己中心のものの見方を変え、地動説という社会的視野の必要性を説く。そのためには国民に目を広く世界に向け、日本におこっている戦争礼賛の国家主義の風潮を否定した。戦中はこれで発刊停止ともなる。

そしてさらに重要なことは、この作者の吉野自身の生き方だ。彼は若くして治安維持法で逮捕され、転向を迫る弾圧下で一年半の投獄を受け、職も失った。出獄後、作家・山本有三などの世話で、明治大学の臨時講師となり、また、岩波書店（岩波茂雄社長）の出版社にも職を得て、糊口をしのぎ、なんとか戦時中を生き残る。その過程で「君たちは・・・」を書く。

戦後になり、雑誌「世界」の初代編集長や、「岩波文庫」の作成にかかわった人で、当時、有数の知識人だった。この自己を曲げず、平和主義で生きる彼の人生そのものが、まさにコペル君であり、源三郎なのである。また編集者・吉野の日常の姿について、彼の本「人間を信じる」のなかで、後輩の緑川亨（のちの岩波書店社長で「世界」の編集長）は、「吉野さんの机の上には、いつも海外からの雑誌や新聞がうずたかく積まれていた」と書いている。吉野の目は常に世界だったのだ。これは学ぶに値する。

もう一つの本だが、もう140年も前にロシアの文豪・トルストイが書いた『人はなんで生きるのか』がある。その日のパンにも事欠く貧しい靴屋職人が、あるとき町の礼拝堂の陰でうずくまる裸の青年を見つけ、家に連れ帰り、妻も彼に食事を与える。その青年は天子であったが、罪を犯し、神の怒りに触れ人間

界へ追放されていたのだ。その天子が人々の親切な心で、「人はどうして生きるのか」を学び、神の許しを得て、天上界へ帰っていく。というものだ。原点は、「人は愛によって生かされている」というのがテーマだが、貧しい靴屋夫婦の正直な生き方＝一枚しかない衣服を天子に与え、自分の家に6年も住まわせる行為などで、天子すら学ばせたという、ロシアの伝承文学だとされる。トルストイはロシアの貴族＝伯爵家の生まれで、なに不自由なく暮らしていけるはずが、軍役や戦争により社会の矛盾を学び、世界一の大河小説「戦争と平和」を書く。さらには自らの莫大な全財産を貧しい人民に寄贈したい、とするなどの思想の持ち主であった。

吉野も若いころの軍役と戦争体験などから、反戦・自由主義思想に変わるのだが、日本とロシアで、この苦しい時代下に、彼らはしっかりと生きた。この二人の生き方は、神とか正義とかを問うて、世紀を超えて現代の私たちに伝えるものがある。

九、再度、「沈黙」と「聖書」の世界

再度、転向論でギリギリの選択での踏み絵をふりかえる。

1989年の労働界再編、総評解散＝連合発足時に、日本の総評内の左派労働者にはいかなる選択肢があったのか。連合と総評の違いは、階級的か協調主義かのナショナルセンターかである。言葉を変えれば社会主義か自由主義かの思想と労組の組織選択だったからだ。連合加盟はその協調派への転向の証＝踏み絵とされた。その踏み絵を踏むか否か。多くの人々の心は揺れた。左派としての矜持の決断と私には思えた。

遠藤周作の小説「沈黙」からもう一度、転向論をみる。「司祭（ロドリゴ）が足を上げた。そのとき『踏むがいい』と銅版のあの人司祭に向かって言った。私（イエス・キリスト）はお前たちに踏まれるため、この世に生まれ、お前たちの痛さを分かたため十字架を背負ったのだ。こうして司祭が踏絵に足をかけたとき、朝が来た。鶏が遠くで鳴いた」と遠藤は書いている。神は沈黙するが、キリストは「踏むがいい」とロドリゴに答える。「沈黙」の最高の瞬間だ。そして、ロドリゴが踏み絵を踏み、そのときに「鶏が鳴き、新しい朝が来た」と書く。

また「沈黙」では、ロドリゴがイエスに向かって「主よ、あなたがいつも沈黙しておられることを恨んできました」と問うと、イエスは「私は沈黙していたのではない。一緒に苦しんでいたのだ」と答える。そして、「強い者も弱い者もないのだ。強い者より弱い者が苦しまなかったと誰が断言できよう。司祭は

早口でこういった」とも書く。

これについて、アメリカ人で遠藤周作の本をいくつも英訳をしている翻訳家のヴァン・ゲッセルさんは、『沈黙』刊行 50 周年のシンポで以下に語る。要約すると、「ロドリゴやキリシタンがたとえ踏み絵を踏んだとしても、キリストは同じ苦しみみを感じながら、我々のそばを絶対離れず、同じ道を歩いておられたのだ」とする。踏み絵を踏むロドリゴをキリストは許し、『踏むがいい』と声をかけ、ロドリゴに『新しい朝が来た』のです」と論評している。

この「沈黙」のもととなる新約聖書ではこれと同文がある。「マタイ伝」からだ。イエスがユダヤの神を冒瀆し、国家反逆罪者として逮捕され、尋問を受ける。弟子たちも逮捕を恐れ、イエスとの関係を否定するとき、「するとすぐ鶏が鳴いた」とある。転向が生をつなぐのだ。しかしイエス自身も十字架にかけられ、処刑されるとき、「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」といって、息を引き取る、などが新訳聖書にある。

小説「沈黙」では司祭のロドリゴとキリストの「沈黙」論争で、イエスは「踏み絵を踏む人々と一緒に苦しんでいる」として、ロドリゴの罪を許す。新約聖書ではキリストと神の「なぜ神は私を見捨てるのだ」という問いに、神は答えず、イエスは処刑され死ぬ。しかし聖書では神がイエスの死から 3 日後に復活させ、イエスが「神の子」であることを証明するが、人間世界での宗教、思想には、こうした死から生へ蘇る復活の展開はない。

結論だ。人は罪を犯すが告白により、神はそれを許し、キリシタン弾圧では踏み絵を踏んでもそれを許す。では社会主義の思想的な転向 = 踏み絵を踏んだ場合ではどうかだ。神が踏み絵という人の罪（転向）を許すというとき、人の思想の転向という踏絵の行為に、正邪はあっても、許されない罪などあり得ない。人はそもそも罪を犯す存在なののだとは、古今東西を問わない哲学者の多くが語っている。すべてからの解放と自由を掲げる社会主義思想に、自ら反省するとき、許されない行為などありえようか。

十、統一戦線論の提起

かつて「統一戦線論」を書いた清水慎三は、その必要性を「統一戦線論構想をもたない左翼政治勢力は、その掲げる立て看板がどうであれ、ホンモノの革命勢力とは受けとりがたいし、批判勢力とはなりえても、政治的敵手とはなりえない」と書いている。さらにこの統一戦線とは、1921 年のコミンフォルムの第 3 回大会ではじめて提起されたことから、共産党の用語であるとして、これが障害ともなるともいう。

2005年ころ、郵政労働者ユニオンが郵政産業労働組合との統一をめざし、全国のいろんな人たちと、共同行動追求のための「共同テーブル」の話し合いを行っていた。私たちはこの統一には消極的であった。その立場は、郵政ユニオンは反連合・非全労連が原則である。国鉄闘争も継続中で、全労協として最後までこのたたかいを頑張りたい。1970年代の安保闘争や、以降の反マル生闘争で、彼らはなにをしたのか、という不信感が活動家たちには残る。

郵産労（共産党系）との統一の前に、社会党系の諸グループとの統合が先ではないか、という立場であった。

あるとき、この組織オルグの共同テーブルで、ある人たちと話をしているとき、相手の方から「共産党組織には血の一滴も与えない」と郵産労との共闘を拒否する言葉をきっぱりと言われた。自らの職場で直接、組織戦などで激突する関係にある左派の、郵産労への不信感はみな同じであり、それ以上の進展はなかったが、いわゆる左派の共産党アレルギーは、消しようもないことを実感したことがある。しかし、私たちがそこで立ち止まれば、この統一への努力は水泡に帰す。

結局、2008年から4度のストライキの統一行動や話し合いで、2012年の7月の全国大会で郵産労との組織統一をなしとげるが、そのときも友人たちから「大丈夫か」とか、「共産党へ取り込まれるのでは」と危惧をされた。これはいままも変わらない。

そしてありえないはずの組織統一から6年がたった。新・郵政ユニオンも頑張っているが、非力さは隠せない。それはともかく、その後の全国的な組織再編はどうなったのだろう。全労協も全労連も組織的な変化はない。共同行動は一部では続くが、メーデーすら共同開催は難しい。これまで通りが一番いいのだろうが動きは鈍い。私自身が2015年に長崎全労協の議長を退任して非現役となり、全労協の全国大会へも出ていないからか、情報は聞かない。いいかえれば、郵政ユニオンの異例な組織統一という行動も、周囲にはあまり影響も与えなかったことになる。統一は小さい事件であり、関係者以外には「あっ！そうか」で終わっているのだろう。

そこで、清水慎三のように大きな提起ではないが、左派のたたかいには常に統一戦線論は必要だと思い、転向批判の発言を取り消すことで、次へのステップを踏み出したい。これなしには次の再編もありえない。全労連系の過去を批判するだけで、こちらが不信感を持ち続ける限り、両者の信頼回復や友好などはあり得ない。しかしその間、左派はそれぞれ孤立し、未来もあまり見えない。

私は反連合・郵政労働者ユニオンの独立労組を作り、そのとき連合派を「転向者」と批判したものとして、これを取り消し、共同行動、統一を目指す役割と責任があると思う。そしてそのために、郵産労との統一に舵を取り、組織統

合へ動いた。そのことで労働界の再々編へ一石を投じたつもりだ。そして今、この再統一をなしたものとして、その高見からの景色を自覚し、次へのステップを踏む責任もまた私たちにあると考える。これが今回の統一戦線論であり、現在の課題であると思う。

十一、さいごに、

この転向論は、先の転向批判を「過ぎた言葉」として取り消し、共に生き、共にたたかうことを目指したものである。労組活動家として生きてきた私としては、現行のナショナルセンター3 鼎立を解消し、再統一をなすべきと考える。そのため 2012 年に私たちの原則を少し譲り、大同小異論で全労連の郵産労と統一を果たした。過去から未来への確かな布石である。

これまでの日本の労働運動ではあまり例がない「水と油」の労組統一は、日々、具体的な運動を伴う、生きた実験であり、先の見えない路線でもある。しかしその起点は、危機突破のための最善策としたからだ。これはぜひ多くの労組へ広がってほしい。すぐさまの組織の統合は困難でも、統一戦線的の共同闘争は可能であろう。いま始める新しいたたかいに「遅い」ということはない。勇気ある決断が、次の一手なのだ。